

随 想

未来地理学のすすめ

千 歳 壽 一

地理学は地域を研究する学問といわれている。時空間のうち、空間を対象にするのである。しかし、歴史地理学という時間を含む地理学が立派に存在している。過去のある時間における空間を対象にしているのである。

それでは将来の空間を対象にする未来地理学はないのだろうか。

地理学の社会貢献を、地理学会内で奨励している。地図学や地域分析法などの有用性は明らかである。それ以外はなんであろうか……地域を総合的に捉える、地理学的な発想法が重要である……。確かにその通りであろう。で、それで？ Et Alors?

社会からの大きな要請は、この地域がこれからどうなるか知りたいという問いに応えることである。すなわち、地域の将来を予測することである。一般的に、現状は現地の人々が詳しく承知している。他地域と比較までしている。ただし理論付けはなされていないようである。

予測の困難性が大きいことはいうまでもない。人間にないものは、未来を知る力であると、トルストイ「人はなにによって生きるか」のなかで主人公にいわせている。将来のことは神様しかわからない、というのは真実である。しかし、ある分野では予測し得る場合もある。医者や気象予報士のような、特定の自然科学的な対象についてはかなりな程度可能になっている。社会科学において

も、ある条件や範囲内での将来の姿を描くことは荒唐無稽な話ではなくなっている。従来からの利用可能な蓄積も徐々に増加しつつある。

地域の予測の研究のいとぐちはある。地域形成のメカニズムの研究が行われているが、その将来への延長の可能性は十分考えられる。初歩的ではあるが、地理情報科学系の地域分析法には将来予測の方法が含まれている。他の学問分野の成果も少くない。それらの利用などなど、手がかりはいくつもある。

「地理学は昔の特急列車の展望車 - 後ばかり見ている」との批判とも嘲笑ともつかぬ声が聞こえる。地理学者にしてみれば、当たりもしない予測をしても仕方がない、ということである。目的のない予測をしてもむだである。地域や社会の将来のあり方を考えるため、予測が必要なのである。年金問題は、政治的な動きによる面が強いが、人口予測が当たらなかったためという声もある。それは予測を一部の人達にまかせてしまい、偏った予測を基に政策を決定したためといえそうである。だからこそ、総合的な視野に立つ予測が必要なのである。望ましい将来の地域や社会を造るため必要なのである。社会工学としての地理学、地理工学というのがあってもよいように思える。

未来地理学への道筋を考え、実現を目指したい。